
日本最長の恋愛？

菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本最長の恋愛？

【Zコード】

N5473A

【作者名】

菖蒲

【あらすじ】

剣道の試合のため、東京に来ていた主人公。試合の方は順調で、ベスト4に残ったのだけれど……突然現れたショーキーの怪人（？）や、その兄貴、それに謎の師匠に振り回される主人公。謎が謎を呼ぶ本格ミステリー……ではありません。恋愛小説です。

アンタ誰でいすか

「パーン！」

静寂に包まれた会場の中で、小気味の良い音が響いた。静寂が一気にざわめきへと変わる。

「面あり、勝負あり」

審判の宣言を聞き、相手に一礼して、俺はコートの外へ引っ込み、面を取つた。

「ふう」

面を取つた瞬間、心地よい風が頬を撫でる。しばらくその余韻に浸つていたが、その内、会場の熱気に耐えられなくなり、俺は会場の外へ移動した。

外へ出ると、再び心地よい風が、今度は俺の体全体を通り抜けていった。いやー、この感触が気持ち良いんだよなあ。

「あと、一回か……」

俺は小さく呟く。俺は今、剣道の全国大会に出場するため、東京に来ていた。一回と言うのは、優勝までの試合数である。今日、個人戦のベスト4までが決まる。俺はさつきの試合で、ベスト4に残つたのだ。残りの試合は明日なので、今日はとりあえず何もする事は無い。本当ならホテルに帰るべきなのだが、付き添いの俺の道場の先生たちはまだ試合を見ているので、こうしてブラブラしているという訳だ。

「さて、どうするかな……つてつわッ」

しばらぐ「ラブララ」していると、急に、誰かに腕を引っ張られた。

「なッ……」

予想外のさらに外の出来事に俺が絶句していると、人気の少ない裏路地に引っ張り込まれた。この条項は……じゃなかつた状況は、

もしかしてピンチ？

「うわッ」

などと考えていると、俺はいきなり、腕をつかんでいた男に突き飛ばされた。その勢いで、俺は尻餅をついてしまう。抗議してやろうと立ち上がり、その男のほうを見ると、4～5人の男たちが立っていた。一人と思っていたが、どうやら多人数だったようである。いやあ、中々計画的なこつて。一人一人顔を見てみると、どいつもこいつも陰険そうな顔立ちで、とても友好的とは思えない視線を投げかけてくる。

「よお、阿久沢君。さつきはどうもありがとう」

未だ、状況が理解できていない俺に、真ん中に立っていた男が話しへきてきた。なんか馴れ馴れしいけど、アンタ誰でいすか？ ていうかその前に、コイツなんつった？

「さつき？」

まつたく意味がわからない。こんな奴等とは会つたことも無いはず。ん？ いや待てよ、そういうえばどつかで見たような気も……。そんな俺の心情を察したのか、さつきの男が親切にも事情を説明してくれた。

「さつきの試合だよ。つたくてめえに勝てば俺がベスト4だつたのによお、どうしてくれんだよ」

おお、そうかさつきの俺の対戦相手か。どうりで見た事あると思った。いやあ、そうかそうか……じゃなくて、なんつだその訳の解らん言いがかりは？ いや、確かにアンタを倒したのは俺だけど、今時そんなガキみたいな理由で喧嘩売つてくるか普通。武道やつてんならもうちつと潔くあれよ。あー、なんか怒り通り越して呆れてきちまつた……とつとと張り倒して帰るか。と、俺が思った瞬間、更に訳の解らん事が起つた。

「やめてください」

その男たちのさらに後ろの方から、誰かの声が聞こえてきた。何だ？ もしかして誰か助けに来てくれた？ ラッキー、それなら早

くヘルプ、み、い……。一瞬、淡い希望を抱いた俺だったが、それは、その声の主を見た瞬間に、脆くも崩れ去った。世の中そんなに甘くないってね、いや、むしろしょっぱいだろ。何故かって？ だつて、そこに立っていたのは……物凄い綺麗な女の子だったからさー、アーハツハツハ……どぼじでそうなるの？

……厄日か？

そこにはものすごい綺麗な女の子が立っていた。歳は俺と同じ位か一個下（俺は14）。端正な顔立ちで、身長も結構高い（160cmくらい？）。言ってみれば、妖精のような感じである。

そんなことはどうでもいいとしてだ。問題は、何故そんな女の子が明らかに場違いなこの場所にいるのか、ということである。

「あの～」

ふいに、その女の子はものすいか細い声で呼びかけてきた。そこで、俺を始め、世界天然記念物（俺の中で既に決定）の人々もフリーーズから開放される（この人達は今までずっと止まっていた）。

「なんだ、てめえは

フリーーズから開放された天然記念物その一が、その女の子に怒鳴りつける。

「ひ、一人を大勢で囮むなんて卑怯だと思います」

男の声に、少し怯んだようであつたが、なんとか声を搾り出して いる（男の質問の答えにはなつていながら）。

「んな事でめえにや関係ねえだろうが」

男のうちの一人が、そう怒鳴りつけながら俺に背を向けその女子の方に歩いていく。他の天然記念物その2～5の注意もその女子の方に向いている。チャンス、そう思った俺は、俺に背を向けた男に対して思いつき飛び蹴りを喰らわせた。

「ぐえ

まったくの不意打ちにその男は、ベシャツ、という効果音が良く似合いそうな形で前のめりに倒れた。女の子の方に注意が向いていたその他の男たちも、一瞬反応が遅れる。

「行くぞ」

俺は、飛び蹴りを男に喰らわせた後、振り向きもせずにその女子の手を取つて走り出した。

「えつ、えつ」

その女の子は動搖しながらもひやんと走つてついてくる。

「待ちやがれ」

と、天然記念物の皆さんが叫ぶ声が聞こえたが、もう遅い。俺とその女の子は驚異的なスピードで会場の方へ向かっていた。人間やれば何でもできるもんである。案外会場から遠くなかったので、すぐには会場の中へ入る事ができた。流石に会場の中までは追つてこず、とりあえず一息つくことができた。その女の子も俺も相当息があがつていて。

「ハア、ハア……あ、あの……」

ふいに、その女の子が声をかけてきた。

「阿久沢桂さんですよね」

「ハイ？」

これまた予想外の外の攻撃に、俺は再びフリーズする。何故にこんな女の子が俺の名前を知っている?と言つよりコイツは誰だ?て言つか今日は何だ?厄日か?ショ カーの陰謀なのか?それともザン カール帝国の強襲か?……などと俺が訳のわからん思考ループにはまつていると、

「あの~、阿久沢さん?」

と、その女の子が心配そうにこちらを見ていた。

「えッ、あ、ああ」

そこでやつと思考ループから抜け出した俺は、とりあえずこの状況を整理してみる事にした。

「よし、んじゃあ、俺がこれから多数質問をするからあんたはそれに答えてくれ。まず、あんたは誰だ? なんで俺の名前を知つている? 何でさつきあそこにいた? あんたはショ カーの戦闘員か?」

いきなりすぎる俺の質問に(ひとつ意味のわからんものが入つていたが)、その女の子はしばらく眼を白黒させていた。流石に答えられないかと思つていて、急に持ち直し、

「えっと、私は真富寺皐月です。阿久沢さんの名前はさつき準々決勝に出てたから知っています。さつきあそこにいたのは、なんか怖そな人たちに阿久沢さんが囮まれてたからです。……ショ カー？」

と、全部答えてきた（流石にショ カーはわからなかつたようだが）。俺はまさか全部答えてくるなんて思つていなかつたので、一瞬呆気に取られたが、なんとか平静を装つて再び問い合わせた。

「え、と真富寺さん？とりあえず俺の名前を知つていたのは納得した。だけど、あそこにいた理由が全然意味がわかんないんだけど……」

そう、俺が囮まれていたから、なんて言つのは理由にならない。大体俺たちは見ず知らずの他人なのだから。すると、その女は、「え？ 意味がわからないつてどういうことですか？ 困つている人を助けるのは当然の事だと思うんですけど……」

と、俺のこけそくな返し方をしてきた。なんて女だよ……、こいつは宇宙天然記念物に認定できる（もちろん俺の中で）。今時そんな考え方をしてるのはどつかの少年誌の王道物の主人公ぐらいだぞ、と叫んでやりたかったが、なんとか押し留めた。

「あのなあ、あんた自分の事考えなかつたわけ？ あそこで逃げ出せたから良かつたようなものの、逃げれなかつたらどうなつたかわかつたもんじやないんだぜ」

俺は、心底あきれ返つたようにして（半ば意識的に）言つた。だが、その女はまったく意に介した様子は無く、平然と、「まあ良いじゃないですか、助かつたんですし」

と言つた後、小さく笑つた。本当に妖精のような笑みだつた。もともと綺麗とは思つていたが、笑うとさらに綺麗になる。そこらのアイドルなんて裸足で逃げ出すレベルだ。俺はうかつにも、そのなんとも言いがたい笑顔に思わず見ほれてしまった。

「阿久沢さん？」

ハツと氣付くと、不思議そうな顔をした真富寺皐月がこっちを見ていた。しまつた見られたが、と内心ドキドキしながらも俺は平静

を装つて次なる質問へと移りついた。が、

「お～い、臯月～」

突然前方から声が聽こえてきた。見ると背の高い（180くらい）か？）男がこっちに向かって手を振つていた。横に田をやると真宮寺も手を振つている。どうやら知り合いらしい。

「お～い臯月、今までどうほつつき歩いてたんだ？ 皆もう帰り支度できてるぞ」

傍までやつてきたその男は、俺には田もくれず真宮寺に話し掛けれる。

「ゴメン、お兄ちゃん。ちょっといろいろあつてね」

真宮寺の方もそれに答える。いつたい誰なんだこの男は？ ……つてお兄ちゃんかよ。言われてみれば、なるほどコイツもコイツでかなり整つた顔立ちしてやがる。その長身と堀の深い顔はどことなく中世の騎士を思わせる。と、俺がそんな事を考えていると、そのお兄ちゃんとやらがこっちを向いて怖い顔をしている。真宮寺が横でなにやら言つてしているが聞こえてないらしい。すると、今まで体をフルフル震わせてこっちを睨んでいたのが、フツと力が抜けたようにつなだれている。

「？」

俺が不思議に思つて近づいてみると、その男はいきなり、

「このド変態エロティックスケベ痴漢野郎があああ！」

と、ガバッと起き上がり、油断している俺に対して思いつきり殴りかかってきた。ちくしょう、この野郎とんだ食わせ者だよ。つたく何なんだつてんだ今日は？

ド変態イロ吉スケベ君？

「「」のド変態エロティックスケベ痴漢野郎があああ…」
と、いきなりお兄ちゃんさん（名前知らないからさん付け）に殴りかかられた俺は、

ドゴッ！

と、その攻撃をまともに受け、地面に突っ伏した。……と、普通はなるだろうが、俺の場合はちと違う。

「「」のド変態……（以下略）」

と、いきなり殴りかかられた俺は、その繰り出されたパンチを咄嗟に避けて、条件反射で思わず反撃のミドルキックを出してしまった。そのキックをまともに受け、

「ぐえ」

と、お兄ちゃんさんは地面に突っ伏してしまった。

「ヤバイ……」

俺は焦りまくった。何を隠そつ俺は剣道の他に古武術を習つている。戦国時代に造られたとかいう格闘技だ。なんでも素手で敵軍に突っ込んでいくて、更に勝つ事を目的とした武術だつたらしい（今は弱体化しているが）。その俺の蹴りをまともに喰らつたら相当ヤバイのである。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ……」

と、俺が取り乱していると、お兄ちゃんさんが、

「つてえなこの野郎！」

と、なんと立つてきやがつた。

「なつ！」

俺は言葉を失つた。まさか俺の蹴りをまともに受けて立つてこられる奴がいるなんて思つてなかつたのである。俺がボー然としていると、

「へつそ、「」の変態野郎が

と、お兄ちゃんさんが言ひた。……ん？ ちょっと待てよ、わざから自然に言われてるけど、いつから俺は変態になつた？ まさかと思いお兄ちゃんさんに訊ねてみる。

「あのー、お兄ちゃんさん？ ちょっと質問したいんですけど、つきあなたの妹さんになんと言われましたか？」

「あ？ てめえよくもぬけぬけど、まあ良い教えてやるぜ。皐月はな、「阿久沢さんがいて、それから声を出したら迫ってきて、手を引っ張られて逃げて、でも追つてきて、やつと会場についたらお兄ちゃんに声をかけられたの」って言つたんだよお」

俺は頭が痛くなつた。この女、そんな言い方したら勘違にするに決まつてんだろ？ が、主語が抜けてるよ、主語が。つたく本当に厄日だ今日は、こんな事ならあの天然記念物どもをつたと張り倒しそきや良かつた。俺が本気で後悔していると、

「で、もう質問は無いのかな？ ド変態イロ吉スケベ君？」

と、お兄ちゃんさんが顔をヒクヒクさせながら訊ねてきた。言葉は丁寧（？）だが、声には殺氣がぎつしりと詰まつてゐる。もういい加減こんな事してられん、と思つた俺は、目の前で顔をヒクヒクさせているお兄ちゃんさんに事情を説明した。が、

「……つていう訳なんんですけど」

「ん~、そつかそつか、悪かつたねえ。お詫びといつちや何だけど……、これでも喰らえこのド変態イロティックスケベ痴漢おまけに嘔吐き野郎がああ！」

と、また殴りかかられた。またさつきの再現か、と思つたが今度は様子が違つた。さつきのとは段違いに速く、腰の入つたパンチである。

「ちい」

と、どこかで聴いたような台詞を吐きながら、間一髪それを避けた俺は、反撃しようと拳を繰り出したが、腕を跳ね上げられ、さらに膝蹴りが飛んでくる。なんとか弾かれてない方の腕でそれをガードした俺は、少々面食らつていた。

（何だここ、強い。これ、どう考えたって普通じゃないだろ……まさかー）

つかつこに戦いの最中に考え方をしていた俺は、お兄ちゃんさん

の繰り出した前蹴りをまともに受けてしまった。

「ぐッ」

あまりに重いその蹴りに思わず吐き飛になってしまったが、何とか堪えた俺はさつきの疑問を確信にして口に出した。

「なあ、まさかあんた古武術やつてないか？」

その俺の質問に、お兄ちゃんさんの顔が驚愕に彩られる。

「あ、ああ、確かにやつている。しかし何故お前がそれを知っている？」

「ああ、だつて俺も古武術やつてるもん」

それを聞いたお兄ちゃんさんは、口をボカンと開けて放心した。

何故なら、古武術において、同門に喧嘩を売る事は例えどんな理由があろうとも禁止されているからだ。ちなみに規則を破れば厳罰、それが古武術の掟である。

あれ？ ところで、真宮寺は？ ……あ、いた。あつちやあ、こいつも口開けて放心してら。

……長い

「……長い」

俺は一人ぼつんと呟く。真宮寺兄妹が放心してから既に5分、一
体いつまで放心（現実逃避？）していれば気が済むのであろうか？
もつ居ろうかな、などと考えていると、

「……ハツ、ここはどこ？　わたしはだあれ？」

お兄ちゃんさんが何やら意味のわからん言葉を吐きながら現実逃
避から戻ってきた。

「ここは、東京武道館だ、んであんたはここの中宮寺聖円とか言つ
女の兄貴」

ほつといつかとも思つたが、とりあえずその問ひに答えてあげた。
すると、

「ち、ちゅうとぐらい現実逃避をせてくれても良いじゃねッかよ」
お兄ちゃんさんが復活（やはり、錯乱しているフリだつたか……）
した。俺は、もう十分現実逃避の時間をあげたつもりだが、敢えて
そこは突つ込みます、さらに厳しい現実を突きつけてやる。

「んで、同門に喧嘩売った場合の罰だけ……、「滅」と「極」、
どつねが良い？」

ちなみに「滅」は、自分の師匠から制裁を受ける罰で、「極」は、
一週間の間の絶食である（「滅」は、自分の身体が滅びるかと思う
くらいに痛めつけられる事からその名前が付き、「極」は、極限まで
食欲と戦わされる事から来ているらしい）。現実逃避したくなる
のも無理は無い。

「マジかよ……」

お兄ちゃんさんは既に顔が真つ青である。可愛そうに、俺に喧嘩
を（勘違いで）売つてこなければこんな事にならなかつたものを…
…。とは思つが、

「マジです」

やつぱり罪は罪、しつかり償つてもうわねば。

んで、あなたの師匠は？」

「……」この場合、後の事は相手の師匠に任せることになつてゐるので、とりあえずそいつの師匠について聞いてみたものの、ここには剣道の大会で来ている訳であつて、古武術の師匠なんていはば無い。慌ててさつきの質問を取り消そうと思つたら、

来てるんかいッ！ と、ツツコミを入れるが、その時にお兄ちゃんさんの顔が少し安堵した表情になつていたのを俺は見逃さなかつた。

「よし、んじゃあ、あんたらのホテルまで行こい！」
その言葉で、今度はお兄ちゃんさんの顔が一気に暗くなる。その顔を見て、思わず笑い出しそうな自分に対し、やっぱ俺って性格腐つてんなあ、などと思つていて、

ようやく再起動に成功した真富寺が叫んだ。田を向けると、涙を田一杯に溜めている真富寺がいた。やべえ、可愛い、などと思つて

「お願いです、許してあげてください。悪気があつた訳じゃないんです」

と、必死に頼んでくる。まあ悪気が無かつたって言うのはわかる（ていうかコイツが勘違いしそうな状況説明したからだし）。でも一応規則は規則なのだ。そう真宮寺に言つてやると、

と、無茶苦茶落ち込まれた。ここまで落ち込まれると流石の俺も
ちょっと同情する。大体女の涙なんて（男のもだが）あまり見たい
もんじゃない。

「しゃあない、じゃあこれでどうだ。俺があんたらと一緒にそのホーテルまで行ってお兄ちゃんさんの師匠に事情を話す。多少の制裁はあるだろうがなるべく恩赦してくれるよう頼んでやる。これで良い

だろ？」

俺も甘いな、などと思いつつやつ提案してやると、

「ハイツ、ありがと「ひ」やります」

と、真富寺は心底嬉しそうにしている。

「お兄ちゃんさんもそれで良い？」

向き直つて、お兄ちゃんさんにも聞く。

「ああ、それで良い。……悪いな」

まだ元気が無いが、少し安心したようである。それから少し話したあと、俺たちは問題の師匠の待つホテルへ向かつた。

「ハイツだ」

「んなツ……」

俺は驚きのあまり言葉を失つた。連れて来られたのはどう見たつて、所謂一つの「ウキユウホテル」でやつだった。

「どしたい？」

皇紀（真富寺の兄貴の名前、ちなみに俺とタメらしい）が不思議そうに聞いてくる。

「え、あ、いや、まじで「」な訳？」

俺にはまだ信じられない（小市民の俺がこんな高級そうなホテルを思い浮かべるはずが無い）。

「当たり前だろ」

皇紀はさも当然とでも言つたように答える。その隣で真富寺もウンウンと頷いている。俺はポカンとしていた。それはもう馬鹿としか言ひようが無い位のアホ顔で。他人が見たら絶対指を指されて笑われるだろう（実際見られているが……）。

「ほら、入るぞ」

そんな俺の背中を皇紀が押し、その前を真富寺が歩いて俺たちはホテルの中に入った。中に入ると皇紀は、師匠を呼んでくると言つて、どつかに行つてしまつた。で、する事も無いので、真富寺と暫くボケーッとしてると、師匠を呼びに行つた皇紀が戻ってきた。

「桂、こちらが俺の師匠だ」

「どれどれ、どんな人だ？」と興味津々でその人の顔を見て目が合った瞬間、俺とその人は他人の迷惑も考えず、目一杯絶叫した（シンクロしながら）。

『あーッ！　あ（お）、アンタ（お前）はあああああ！』

八年前……

『あ（お）、アンタ（お前）はあああああ…』

と、ひとしきり（シンクロしながら）絶叫し終わった後、俺はいきなりその男に殴りかかられた。尋常ではないスピードで拳が飛んでくる。が、俺も予想済みだったので身体を横に捌いて避け、ほぼそれと同時に男の肩と首を掴み、反撃の膝蹴りを入れようと思いつきり膝を振りぬいた。はずだつたのだが、その膝は男の鳩尾みぞおちの数センチ手前で止まってしまった。見ると男はいつの間にか戻した手でガードしている。ふいに男と目が合つた。ほとんど同時に一瞬、俺と男は「フツ」と笑いあつた。それからの俺たちの攻防は激しかつた。すばやく飛びのいて男から離れた俺は、すぐさまハイキックを放つ（「ジャブ」だの「ロー」だのして様子を見るのはルールのあるリングの中だけ、実際のルールなしの戦いでは常に先手を取ることが要求される。先手を取つた後、強引に自分のペースに持つていけばいいのだ）。だが流石に男も慣れている、しゃがんでいなし、すぐさま反撃に移つてくる。だが俺もただハイキックを撃つたのではない、避けられるのは考慮に入れていた。

「喰らえツ」

俺は男の頭上を通り越した脚を強引に男の頭の上に戻し、踵落しを放つた。流石に予想外だったのだろう、今度は避ける事はかなわず、男は腕で俺の踵落しを受けた。俺は男が受けたのを確認して、脚をどけた。それから暫く、俺と男は見合つていた。周りでは皇紀と真宮寺を含めホテル内にいる人間のすべてがただ啞然としている（ま、当たり前だろう）。

『フツ』

どちらからとも無く俺と男は笑い出した。

『ふはは……ふははは……はーっはっはっ』

傍から見たらかなり異様な光景であろう、こんな高級ホテルの中

でいきなりストリートファイトをおっぱじめた男一人が、今度は一斉に笑い出したのだから。だがそんな事はお構い無しである、俺も男も笑い続けている。暫く笑いあつた後、俺は男に話し掛けた。

「久しぶり、隼人さん。はやと相変わらず強えなあ」

そう、俺はこの人と知り合いである。この人は石動隼人、俺に古武術を教えた人物である。性格はかなりいい加減だが、強さは折り紙つき。俺の師匠であり、目標だつた人だ。それが、4、5年前まで富崎に住んでたのだが、急に北海道へ引っ越してしまったのである。そういう訳で今まで連絡が取れなかつた訳だが、まさか皇紀の師匠だつたとはねえ。偶然が重なり過ぎている気もするが、まあこの際良いだろう。そういう考えているうちに隼人さんも返事をしてくれる。

「久しぶりだな桂。にしてもお前随分強くなつたな、見違えたぞ」その言葉は結構うれしかつた。なぜならこの人は俺の永遠の目標なのだ。その人に誉めてもらえたのだから自然と顔も緩んでしまう。そしていろいろと話し込んでいると、横で啞然としていた皇紀が隼人さんに話し掛けた。

「し、師匠、そいつと知り合いなんですか？」

大分驚いているようである。まあ無理も無いだろう、今日知り合つたばかりの赤の他人と自分の師匠が知り合いだつたのだから。それに対して、隼人さんは、
「おお、そうかお前は知らなかつたな。こいつは俺が富崎にいたころの弟子だ。お前らにも良く話してやつたる。て言つたが写真見せてやらなかつたつけ？」

と返す。ん、ちょっと待て、俺のこと話したのかこの人。なんか不安になつてきた。なぜならこの人は人の事を有ること無いこと付け加えて話すのが大好きなのだ。どんな事を話されているか知れたもんじやない。そこで俺は、
「隼人さん、俺の事まともに話したんでしょうね。ぐだらない脚色なんか付けてたらそんときや……」

と言つてバキボキと骨を鳴らす。こういう時の隼人はえらく腰が低くなるため、こちらは強く出れる。

「ははは、大丈夫だつて、まともに話したよ。そうだ、お前の事話したときによお、皐月が合いたいって言い出したことがあつたんだよ、『写真見せたときだつたかな？』 そん時「一目惚れか？」つて『冗談半分で聞いたらよお、あいつ顔真っ赤にして俯きやがつたんだよ。ありや完璧お前に氣があるね。お前アプローチかけてみたら？』

「 そうか、まともに話したか、良かつた良かつた。ん？ 真富寺がなんだつて。一目惚れだあ、確かにあいつは可愛いしそれなら嬉しい限りだけど、んな都合のいい話あるわきや……待てよ、確かに写真も見せたつて言つたな。となるともしかしてさつきのは偶然じやなかつたのか。考へても仕方が無いので、俺は真富寺に直接聞いてみることにした。

「おい、真富寺」

「あ、はい」

「お前よ、隼人さんから俺の顔と話聞いてたんだつてな」

「……」

「て事はよ、さつき俺の顔と名前を既に知つていたと言つ事に納得のいく説明がつぐ。よくよく考えたら準々決勝に出てたからつて言つて、俺は面をかぶつてたんだから顔まで知つてるのはおかしいよな」

「……」

「つまりだ、俺が言いたいのは、さつきお前があそで止めに入つたのはただのお節介じゃなく俺だつたからじやないのか、つてことだ。どうだ、当らすとも遠からずつてとこだろひ」

「……はい。その通りです」

案外あつさり白状したな。もつと誤魔化すかと思つたが。だが、まだ疑問は残る。

「なんでだ？ いくら俺の顔を知つているからと言つて俺を助ける理由がどこにある。俺たちは赤の他人だぞ」

隼人さんが言つてた事はこの際無視だ。俺はこいつの口から直接理由を聞きたい。少しして、真宮寺は口を開いた。

「やっぱり覚えていないんですね。そうですよね、もう8年も前ですもんね」

その口調は寂しそうだった。にしても8年前つて何があった。俺にはまったく記憶が無い。俺が唸つていると、真宮寺が、

「あ、いえ、別に無理に思い出してくれなくても構いません。ちょっと悲しい気もするけど」

と言つてきた。いや、そんなに悲しそうな顔するなよ。なんか俺が悪い事しちまつたみたいじゃねえか。8年前か……、なんかあつたかなあ。駄目だ思い出せない。しょうがない、真宮寺に聞くか。「なあ、8年前つてなにがあつたんだ？ 悪いけど教えてくれ」俺がそう言つと、真宮寺は少し迷つたような表情を作つたが、すぐには、

「そうですね。私だけ覚えてて、阿久沢さんは覚えてないっていうのはなんか癪ですしね。わかりました、お話しします」

と言つてくれた。だが、俺はこのときその内容が、俺が真剣に古武術を習い始めるキッカケとなつていたことなど、知る由もなかつた。

王子様が助けに参りましたよん

あるところに一人の女の子がいました。その娘の名前はサツキと言います。サツキは、幼いころから剣道を習っていて、その日は試合で宮崎まで来していました。そしてその会場で、サツキはある事件に巻き込まれます。それが、ある少年との最初の出会いのきっかけでした。

サツキは、一人ぼつんと林の中を歩いていました。自分の試合は終わつてやる事もなくなつたので、他の人の試合が終わるまでブラブラしていようと思ったのです。サツキは、その林が気に入つていました。別にこれといったものは無いのですが、その葉っぱの擦れあう音が、妙に気に入つたのです。サツキは、暫くそこを歩いていました。ふと、林のざわめきが消えました。少し気味が悪くなつたので、そろそろ帰ろうかと思って会場の方へ歩き出すると、知らないおじさんが目の前に現れました。

「君、一人？」

「は？」

余りにも怪しき爆発の発言のため、サツキは思わず素つ頓狂な声をあげてしましました。このおじさん、どう見たつて変質者です。ということでサツキは無視して走り出しました。変な人についたら無視して逃げなさいと親に言われていたのです。ですがそのおじさんは、サツキの手首を掴んで逃がすまいとします。

「そんな無視しないでさあ、一緒に遊ぼうよ」

サツキは、苛立ちよりも嫌悪感を感じました。それほど気持ち悪く、怖がつたのです。

「嫌ッ、離してください」

サツキは逃げようと手を振り払おうとしますが、サツキはまだ6歳の女の子なので、振り払う事が出来ません。それどころかおじさ

んは、痛みを感じるほど、よりいつそう力を込めて手首を掴んできます。

「キヤ……ムグ……」

サツキは叫ぼうとしましたが、おじさんに口を抑えられてしまします。サツキは恐怖と嫌悪で震えだしました。

「ん~いいねえ、かわいいねえ」

おじさんはそれを実際に楽しそうに見ていました。サツキは絶望しました。自分はこのまま誘拐されてしまうんだと。ところが、「オッサン、いい歳にして誘拐なんてやつてんじゃねえよ。犯罪だよ、犯罪」

「きなり後ろから声がしました。おじさんにつけられてサツキも後ろを振り返ると、そこには、自分と同じくらいの男の子が立っていました。おじさんを見上げてみるとフルブル震えています。そこにはさらに追い討ちをかけるように男の子は言います。

「オッサンロリコンってやつ? も~いい歳して、何やつてだか」

その男の子の口調には明らかに侮蔑の色が混じっていました。

「僕、いい加減その口閉じないとおじさん怒るぞ」

おじさんはいい加減頭にきたのか少し怒った様子で言いました。しかし那个少年は、そんなおじさんなど気にした様子も無く、サツキに、

「いよオ、捕らわれの姫様。王子様が助けに参りましたよん」

と、とても楽しそうに微笑みながら声を掛けました。サツキは、なぜだかその時胸の高鳴りを感じました。サツキは本が大好きで、特に白雪姫などに代表される「王子様がお姫様を助けに来る」というシチュエーションにずっと憧れています。なのでこの状況で、しかもあんな台詞を吐きながら目の前に現れた那个少年に、サツキは言いようの無い感情を抱いたのです。分かり易く言つと惚れちゃつたのです。サツキは、しばらく那个少年の顔を見つめました。少年もサツキに微笑んでいましたが、無視されたのが頭にきたのか、おじさんが顔を真つ赤にして少年の方を睨んでいるのを見つけると、

いたずらを思いついた子供のよつよな笑顔を顔いつぱいに浮かべて、おじさんに話しかけました。

「オッサン、やっぱ駄目だよ犯罪は、捕まっちゃうよ。それとも別に捕まつても良い」と思つてる訳?」

おじさんはもう我慢も限界に来ているようだ。顔は既に赤いキングス イムになつています。ですが、その少年はそれを面白がつているようで、つこにトドメの一言を放つてしましました。

「あ、もしかして会社でリストラされてお金も無くて、その上妻と子供に逃げられて路頭に迷つてる?」

団扇だつたようです。おじさんはとうとう切れてしまいました。

「この餓鬼イ、黙つてれば調子に乗りやがつてふざけるな。私が一休何したつて言つんだ(誘拐です)。私は会社のために汗水たらしくて働いていたんだ。いつもいつも残業でも耐えてきたんだ。それを何だ、いきなりクビだと、おまけに女房と子供はどこかに行つてしまつし、住んでいたアパートは追い出されるし、何で私ばかりがこんな目にあわなければならぬんだ」

錯乱して、頼んでもいらない自分の過去まで話しています。ですがその少年は、大した感情も抱いた様子も無く、あつけらかんと言い放ちました。

「んなもん俺の知つたことかよ、あんたの努力が足りなかつたんじやない? あ、それよりもう警察呼んであるからもうすぐ来ると思つよ」

「警察……嘘だ、なんで私が……そん……ウ、ウワアアアアア!」

おじさんはどうやら逝つちゃつたようです。それまでサツキを掴んでいた手を離し、奇声をあげながら少年へ殴りかかつていきました。すると、少年は一ヤツと笑い、突つ込んでくるおじさんの顔面に、思いつきりカウンターの右ストレートを放ちました。おじさんは、よほどそのパンチが効いたらしく、足元がおぼつきません。

「つるあ

「ウワアアアアア!」

そこへ、少年が横から軽く蹴りを入れると、おじさんはよのよりと林に突っ込んで、そのまま気絶してしまいました。

「ダイジョブ?」

少年は振り向くと、啞然としているサツキに微笑みながら話し掛けました。サツキはその時、その微笑みに吸い込まれるような感覚を覚えました。

その微笑みは、今でもしつかりと畠の田に焼き付いています。

……血？

ああ、思い出した。そうだ、そうだった。俺はこの時から強くな
りつて思つたんだ。なぜなら、この話には続^つきがある。

「ダイジョブ？」

俺はその女子に笑顔で聞いた。笑顔の方が安心するだろ^ううと思
つたからだ。

「え、あ、はい。大丈夫……です」

その女子はオドオドしながら答えを返してきた。まあしようが
ないだろ^ううあんな目にあつた直後なのだから。俺はそんな彼女を気
遣つてなるべく明るく聞く。

「俺、阿久沢桂。君、名前は？」

「あ、え……と、名前は……」

そこでその女子の表情は戸惑いから恐怖のそれへと変化した。
俺の後ろの方を見て動けなくなつていて。何だ？と思つて後ろを振
り返ると、そこにはさつき俺が蹴り飛ばして林に突つ込んでいつた
オッサンが顔中血だらけにして物凄い形相で立つていた。そしてそ
の手にはナイフが握られていた。

「このガキが！ もう許さん、殺してやる！」

オッサンのその言葉は、やけに俺の心を動搖させた。こんなオッ
サン怖くもなんとも無いはずなのに。俺は思わず一歩退いてしまつ
た。それは俺の精神的な負けを表す後退だった。

「死ねえええ！」

オッサンが叫びながらナイフで切りかかつてくる。

「うわあああ！」

俺は普通なら軽く捌いて肘でも膝でも決めていたところを恐怖の
ため無様に逃げてしまった。俺はこのとき既に古武術を習つてしま
たが、得物を持っている相手と戦うのはこれが初めてだった。いく

らませてるといつてもたかが8歳のガキである、俺はその時完全にパニックに陥っていた。

「痛ウ」

散々逃げてはいたが、所詮何の型も無くただ無様に逃げていただけである。とうとう俺は腕を切りつけられてしまった。

「……血?」

俺は血を見た。肘から手首にかけて切りつけられ、そこから流れ出る赤いドロドロした液体。それを見た瞬間、俺の思考は全て飛んだ。

「あ……あ……」

そこにあるのはただ恐怖のみ。俺は動けなかつた。オッサンは妖しい笑みを浮かべながらナイフを手に近づいてくる。

「は……はは……死ね、死ね、死ねえ！」

オッサンはナイフを逆手に持ち俺の身体めがけて突き刺した。俺は反射的に眼を閉じた。

（死ぬんだ……俺……）

俺は本気でそう思つた。だが、一向に痛みは襲つてこない。恐る恐る目を開けてみると、そこには地面に這いつくばっているオッサンと、そのオッサンを見下ろす一人の男がいた。

「隼人さん！」

俺は叫んだ。どうやら隼さんが助けてくれたらしい。

「桂、大丈夫か？」

隼人さんは慌てた様子で聞いてくる。

「あ、と、駄目かも……」

そこで俺は意識が途切れた。ただ、意識の途切れる前に目に入つた女の子の心配そうな表情だけ妙に頭にこびりついていた。

それから後は余り覚えていない。病院のベットで目が覚めて、隼人さんにオッサンは警察に捕まつたと聞かされ、それから女の子も帰つたと聞かされた。

「ありがとうございました。また会えると良いですね」と伝言を残された事も。それを聞いて俺は安心したが、同時に悔しさが込み上げてきた。あんなオッサン」ときに恐怖した事。隼人の手を煩わせてしまった事。何より、女の子ひとり自分だけいや護りきれなかつた事。俺は、強さを求めた。何も出来ない自分は嫌だつた。それから8年間、俺はずつと自分を鍛えてきた。もう何が俺をこうまでさせたのかもわからなくなつていた。そして、俺は再びその女の子と会つた。名前も知らない、俺が助け損なつた少女と……。

沈黙。ホテルのロビーに静かなる時間がただ流れた。

「あの……思い出してくれましたか？」

真宮寺が声を発する。

「ああ、思い出した。何で忘れてたんだろうな、わかんねえや」「そうですか、良かつた」

真宮寺は安心したようだつた。

「あの時は悪かつたな、結局助け切れなくて。情けねえや」

「そんな事ない！私は貴方に本当に感謝している。あの時あなたが来てくれていなかつたら、私はどうなつていたかわからぬ」

俺の言葉に真宮寺は物凄い勢いで反論してきた。興奮しているのだろうが、口調が少し荒くなつてゐる。俺は正直驚いた。こんな反論予測の範囲外だつた。真宮寺は、俺の顔を見据えて話し出した。「私は、貴方にちゃんとお礼が言いたかつた。ずっと貴方に……ありがとうと言いたかつた。あの時、伝言だけ残していつたのがずっと心の中に引つかかつていた」

真宮寺は沈痛な面持ちでなおも話す。

「北海道に帰つてから、うつん、違う。貴方が助けてくれたあの時からずつと、貴方の笑顔が離れなかつた。今も心に残つてゐる、貴方の笑顔。私は不思議だつた。何で名前も知らない男の子の笑顔がこんなにも頭から離れないんだろう、何でこんなにも会いたいんだろうつて」

真宮寺の言葉からは、真剣な響きが伝わってきた。

「悩んで、悩んで、悩んで、悩んで、ようやく気が付いた」

そして、真宮寺の表情が眩い光を放つた。

「私は……私は貴方が好きだつたんだつて。私の夢見た運命の人は貴方だつたんだつて」

真宮寺は物凄く清清しい顔をしていた。心の奥に溜めていた思い

をまとめて吐き出したようだ。

「変ですよね、あんなほどんど一瞬の間一緒にいただけなのに。でも、この気持ちは本当です。私の想いは本物なんです」

俺は、どう反応して良いのかわからなかつた。俺はこの女を助け損ねたのに、この女は俺の事を好きだと言つた。その言葉に嘘があるとは思わない。それほど真剣な口調だつた。けど……

「だけど、俺はあなたを助け損ねた。そんな俺にそんな言葉を受け取る資格は……」

「そんなこと関係ない！」

真富寺は悲痛な叫びを上げる。

「私は、貴方が着てくれたとき、私は本当に王子様が着てくれたと思った。そして貴方は、私の心の中に貴方の居場所を作つていた。貴方がいつでも私の心の中に居てくれるような気がした。私にはそれで十分。資格とかそんなのは問題じゃない、貴方が愛しいの」

真富寺のその言葉は俺の心を大きく揺らした。俺はこいつを助け損ねたのに、こいつはこんなに想つてくれている。なら俺はどうする。そんなの簡単じゃないか、考えるまでも無い。

「俺なんぞで良いのか？」

「貴方じゃなきや……ダメです」

「そうか……じゃあ俺たち日本最長の遠距離恋愛になる訳だ」

俺がそう言い終わるか否かの瞬間、皐月の顔が俺の顔の目の前まで来ると、唇に柔らかい感触がした。そして皐月は顔を赤らめて一言。

「はい、よろしくお願ひします」

それから後、ホテルのロビーに居たため多くの客からなぜか拍手を浴びせられ、隼人さんから散々いじられて、皇紀に散々「幸せにしろよ」と念を押された後、俺は自分のホテルに帰つた。次の日の試合は、もうどうでも良かつたのでとつと負けてしまつた。表彰式が終わると、すぐに空港に行き、皐月と別れた。その後、俺は宮崎に帰つた。

「……さてと」
部屋にパソコンの起動音が響く。パソコンが立ち上ると、俺は
メールを読み始めた。もちろん毎日からだ。ちなみに件名は……『
日本最長の恋愛』

日本最長の恋愛（後書き）

いつも、菖蒲です。

この小説をここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

さて、この作品、ホントに初期に書いたものでして、何気に自分の処女作だつたりします。

今見返すとホントに下手すぎて恥ずかしい限りですが、敢えて、修正等は最小限に留めて出しました。

もしも、この小説で楽しんでいただけた方などがいらっしゃれば幸いです。

ではまた、次作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5473a/>

日本最長の恋愛？

2010年10月8日15時52分発行